

校歌について

神奈川県立平塚高等学校校歌として昭和31年(1956年)12月6日に制定された。

校歌が出来るまで

戦争(平塚空襲)で全校舎を焼失し平塚高女(現江南高校)、海軍火薬廠工員寮跡等転々と間借り生活の苦難の時代を経て、黒部丘の旧校地に校舎復興の建設、施設・設備拡充に努めた。

第3代角沢校長が終戦後満10年経過し校舎等の復興も着々と進転し、この辺りで生徒の愛校精神の振興と校運の降昌とを祈念して校歌の制定を企図された。

平高の内田静夫先生の恩師金田一京助先生が石川啄木の思い出話に土岐善麿氏との交友にふれられた事を思い起こし、金田一京助先生に相談、快く土岐氏への紹介状を書いて頂く。

特に日本工業界の明日を担うべき本校科学教育伸展への抱負と期待の精神を盛り込んで頂くよう校歌作成をお願いした。

土岐氏より作曲についてのご助言を頂き信時潔氏をご紹介下さった。

作詞『土岐 善麿・とき ぜんまる』作曲『信時 潔・のぶとき きよし』校歌が誕生した。

(以上 創立50周年記念誌より抜粋編集)

財団法人・神奈川県高等学校教育会館教育研究所の所誌「ねざす」37号(2006年5月発行)の記事で平塚工業高・平塚工科高在籍の中山律子教諭の平工校歌に関係する文を紹介する。

研究所員による「書評」

「消された校舎」旭丘高校校舎の再生を考える会 編 中山律子

「校舎再生を考える会」のメンバー・建築家・校舎を愛する地元住民・騒動の時の在校生...
...様々なメンバーの手記からなる本書を読んだ雑感をここに記してみたい。

(中略・・・)

再編校校歌

「価値ある校舎は再生リニューアルを」と書けば100校計画で数を優先させた神奈川に残すべき価値のある校舎はないと反論する向きもあるかもしれない。

なるほど、しかし私には気がかりなことがある。それは「校歌」だ。

前期再編対象校33、後期再編対象校26(全日制課程のみ)。聞くとところによると、再編校の校歌は新しくプロに頼んだ、公募して内部で手直しをした、とほとんど新しく作成しているが、この再編統合の嵐の中で、刮目すべき「校歌」が幾つも消えていったのではないかと憂うるのである。

私の在職する平塚工科は平塚工業高校と平塚西工業技術高校との統合である。四年前統合前の平塚工業に転勤した私は、四月の昼休み、校門の立番で驚愕した。何気なく見た「校歌」の石碑に「作詞・土岐全麿、作曲・信時潔」の文字を見たからである。

土岐全麿 日本近代歌壇の重鎮にして国語審議会の会長。今やエキデンとして英語になった「駅伝」は彼が読売新聞社社会部長の時企画・実施したもの。

信時潔 現在の芸大卒業後ドイツに留学しシューマンに師事。歌曲「海行かば」の作曲者。

このそうそうたるペアの校歌がなぜ一地方工業高校にと怪しんだ。(卒業生の皆さん、ごめ

んなさい)

調べると平塚高校当時の国語教諭が恩師・金田一京助のつてを頼って依頼したとか、 テノール歌手の奥田良三を招き平塚農業会館で披露したとか、 校長室に掲げてある額は土岐自筆のものであるとか、「へえー」とトリビアの泉さながらのことが色々わかってきた。

再編対象校にはそれぞれその学校の歴史を背負った校歌がある。 プロに頼んでいればその当時でもかなりの額が動いているはずだ。 言ってみれば県民の知的財産であるそれら校歌を再編の下で一刀両断に切り捨ててよいものか、 私には疑問が残る。

勿論二校が一緒になるのだから、 どちらの校歌を残すかという論議は熾烈になる。 さすればこの本の同窓会常任理事のように面倒な議論はたくさんとばかり、「新しい酒は新しい革袋に入れよ！」と叫んでさっさと新校歌を作るという顛末になるのだろう。

たまたま、平塚工業の統合相手・平塚西工業技術は統合の三年前から生徒募集を停止し、同窓会も解散したのでこの校歌を残すことは比較的抵抗がなかった。 校歌を残せと気楽に言うのは統合の紛糾をさほどに経験していないからだといわれればそれまでであるが。

しかし最低限、元の校歌の検証はすべきなのではないか。 校歌制定の経緯や真価を調べずに、はなから「新校歌」というのは耐震診断もせずに取り壊しを決めた旭丘高校取り壊しの暴挙に通ずるものがあると思うのだが。 (以下略・・・)

参照 「ねざす」37号のアドレスです <http://www.edu-kana.com/kenkyu/nezasu/index.html>

平塚工業高と平塚西技術高校が統合し平塚工科高校となると、新たな出発だから(これまでの歴史を切り離して)と新校歌を作るとの意向に我らの先輩「松陵会」メンバーが強力に異議を申し立て、校歌の歌詞に『科学と技術の・・・』文言があり工科高校の校歌として相応しいと決着したと聞いている。思うに校歌継続が同窓会「松陵会」の継続に繋がっていると思う。

在校時は全く意識せずに歌っていたが、制定の背景、高名な先生方による校歌作成、歴史を思い、後何十年も歌い続ける事を望みます。 (文責 S40年卒 箱田 慎二)



作詞者 土岐善麿氏墨筆の校歌歌詞